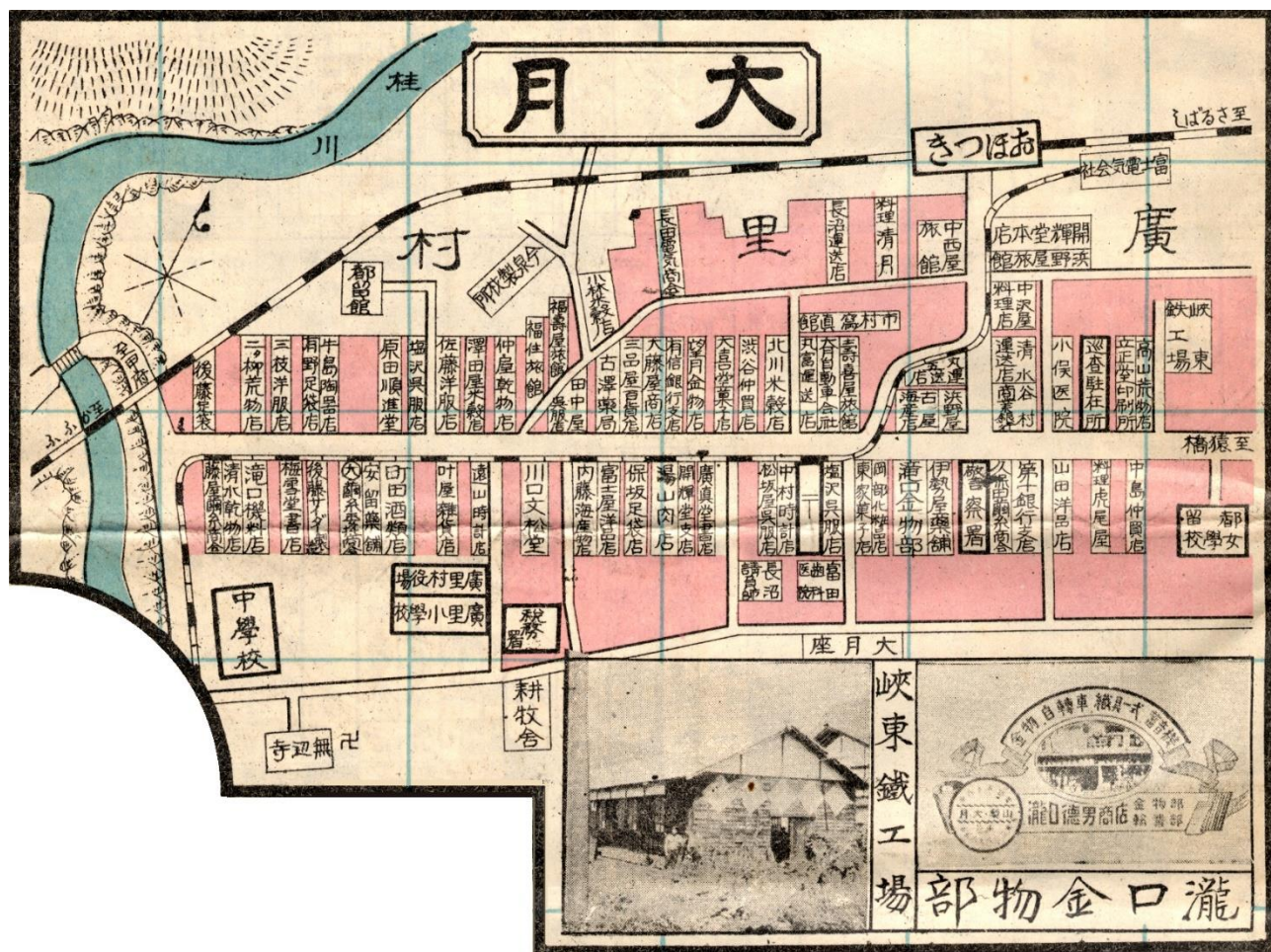
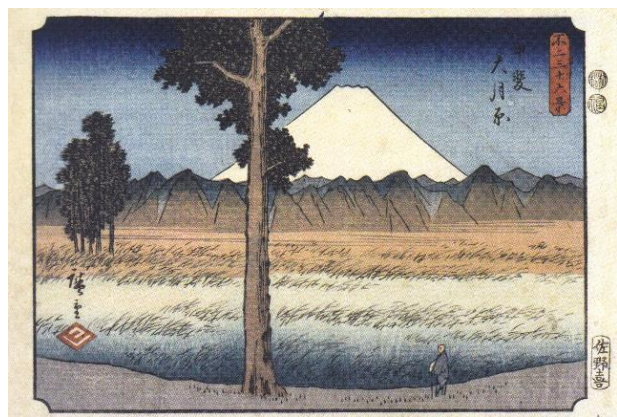




大月の発展



大月村は、『甲斐国志』(1814(文化11)年)によると、古くは駒橋村と一つの村を形成していましたが、寛文9(1669)年の検地で分れ、別村になったとあります。また、集落は甲州道中の大月宿を開設するため、沢井から移住させられた人々により作られたと書かれています。

江戸時代後期の大月宿は、『甲州道中分間

延絵図』(1806(文化3)年完成)に描かれるように、大月追分付近の街道沿いに東西4町あまり(約440m)に家が並び、家数92、人数373、本陣1、脇本陣2、旅籠2の小さな宿でした。町並みから少し外れると、桂川の河岸段丘上の平地には、歌川広重の描く「甲斐大月原」(『不二三十六景』)のように、山並の向こうに富士を望む茫漠とした景色が広がっていました。

明治になり、駒橋村・花咲村・真木村と合併し広里村となりましたが、その中心地は花咲でした。大月が広里村の中心地として、また現在の大月市の中心地として発展する契機となったのは、大月駅の開業(1902(明治35)年)でした。

1903年に中央線・甲府駅が開業すると、国中地方との鉄道による人や物の流れが盛んになり、吉田方面への分岐点にあたる大月にも、人や物が集まるようになりました。

山梨県中学校都留分校を前身とする都留中学校が1910年に、次いで1923(大正

12) 年には県立第四高等女学校（翌年都留高等女学校に改称）も開校して郡内教育の中心となりました。1921 年には甲斐絹市場が開設され、中央線の電化と、富士北麓の観光開発に伴う富士山麓電気鉄道株式会社による新線敷設が発展を加速させる中、1927（昭和 2）年に広里村役場が花咲から大月に移転され、このころまでには、三島神社より大月橋までの中央線南側の街並みのレイアウトがほぼ出来上がりました。

1933 年 4 月には町制施行により大月町が誕生し、大原村（猿橋）にかわって都留郡の中心としての役割を担うようになりました。

明治天皇御召換所跡



天皇の威光を借りて倒幕を果たした明治新政府は、諸改革を進めるにあたって、民衆に権力者の交代と支配の正当性を認めさせる必要がありました。そのためのプロパガンダとして全国各地を明治天皇が訪問する「天皇巡幸」が 97 回も行われました。

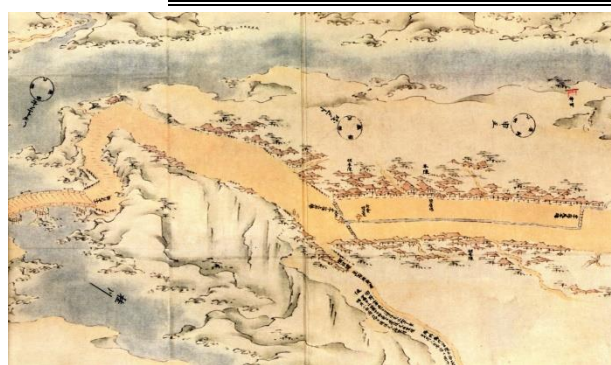
天皇は数百人の供奉者を引き連れて巡幸し、行く先々では孝子・節婦・高齢者・地域功労者などに褒賞（金品）を与えたりして、絶大な権力と仁心を備えた支配者としての姿を示しました。

山梨・大月への巡幸は、中央道地方（三重・京都）への経由地として行われ、1880（明治 13）年 6 月 18 日の正午前に犬目峠を越えて鳥沢に入り、黒野田で宿泊した後、翌朝には笹子峠を越えて駒飼へと抜けていきました。

この巡幸のために、路線の難所には新道の開削や架橋などの道路整備が行われましたが、小仏から勝沼にかけての上り下りの激しい場所では馬車から板輿に乗り換えなければならませんでした。

大月宿の脇本陣だった場所（溝口五左衛門宅）に立つ「明治天皇御召換所跡」碑は、桂川右岸の坂道をおりて大月橋を渡って花咲へと進むため、猿橋で乗り換えた馬車から再び板輿へと乗り換えるために立ち寄った場所（聖蹟）として記念するために 1937（昭和 12）年に建立されました。

大月追分

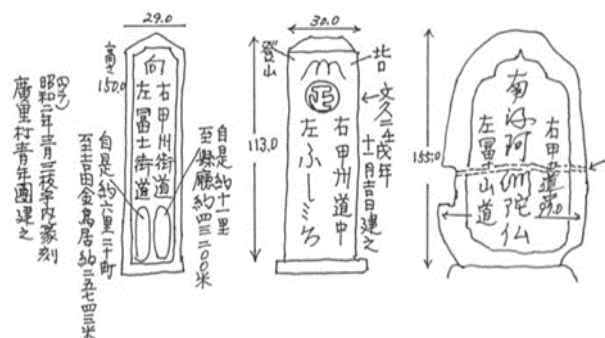


国道 20 号大月橋の東詰は、甲州街道と富士道の分岐点にあたり、「追分」とよばれています。

現在は国道 20 号大月橋（1958 年建造）を直進して甲府に向いますが、江戸時代の大月追分は T 字路になっていて、『甲州道中分間延絵図』にあるように、江戸から来るこの「追分」で右（北）折れて崖沿いに進み、桂川が笹子川と合流する手前で崖を下りて橋を渡る道筋をとりました。

明治国道や鉄道の建設工事、柱状節理崩落防止のための工事や護岸工事等で、現在ではその道筋を正確に辿ることは不可能ですが、「追分」には今も 3 基の道標が置かれていて、「右甲州道中」「左富士道」の文字を見ることができます。

大月追分道標



道標は長い年月の風化と苔の繁茂によって判読するのが難しくなりましたが、次の文字が刻まれています。

向って右側の名号塔「南無阿弥陀仏」には残念ながら建立年が刻まれていません。

真ん中の道標は 1862（文久 2）年の建立です。上部左右に「北口登山」とあり、三峰の富士山が刻まれていることから、富士講の人々が建てたものだということが分かります。ちなみに、その下の丸に正のマークは、富士講各派が用いていた講紋（講印）の一つで、武州榛沢郡用土村（埼玉県大里郡寄居町）周辺を中心として栄えた丸正鐘（まるしょうつりがね）講のものです。

左側の道標は新しく、1927（昭和 2）年のもので、広里村（駒橋・大月・花咲・真木）の青年団が建立しました。

防空監視哨跡



大月市立中央病院裏のおすび山山頂には、飛来する航空機を監視し、その情報を警察に報告する防空監視哨が置かれていました。

現在も跡地には、航空機の爆音を聞き取るための直径 3.5m、深さ 1.5mほどの石垣積みの竪穴（聴音壕）と、その西に事務所の基礎が残っています。

大月市内には、この他に七保と笹子にも設置されていました。

五ヶ堰

「五ヶ堰」という呼称は、用水路が田野倉村・大月村・駒橋村・殿上村・猿橋村の五か村を通ることからつけられました。

1633（寛永 10）年に谷村藩主となった



秋元泰朝により開削が始まり、おそくとも三代目喬知の時代の 1669（寛文 9）年までには完成されたといわれています。

都留市井倉の朝日川と菅野川の合流点付近で取水し、九鬼山・菊花山の山裾を巻くようにして水路が切り開かれ、殿上からは甲州街道に沿って宿内を流れ、最後は猿橋の南詰の東の袂で桂川へと流れ落ちました。

五ヶ堰ができたことにより、田野倉・大月・駒橋の 3 か村では石高において 30% 以上増加し、殿上は古くから湧水が豊富であったことから 13%にとどまりますが、猿橋では 2.6 倍も増加し、五か村全体では 45%もの増加をみました。

江戸時代より長い間、灌漑用水や飲料水の供給や水車の動力源として利用されてきましたが、農業地の減少や上水道の整備により防火用水としての利用や生活雑排水の排水路へと、そして下水道が完備されるにつれて「うるおい」を与えるものへとその役割が変わってきています。

遺髪塚



大月空襲で亡くなった都留高等女学校の女学生と職員らを弔う塚が行願寺墓地内にあります。

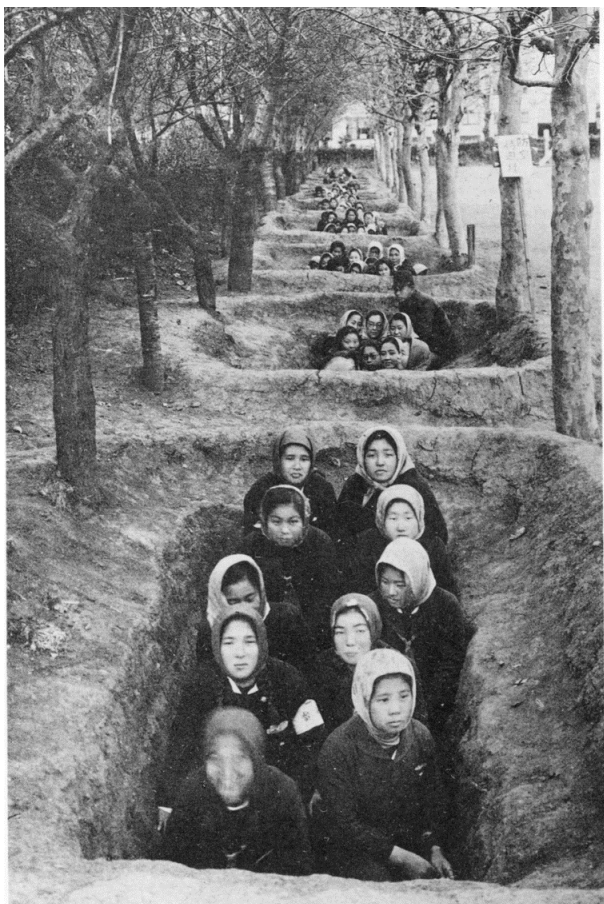
彼女たちが被災した都留高等女学校を見下ろす場所にあり、供養碑の横には被災状況と亡くなった女学生・教師・用務員の 24 名の氏名が刻まれている石碑も建っています。

アジア・太平洋戦争末期、都留高女では、学校工場として物資投下用の小さな落下傘を製造し、女学生たちが作業に従事していました。

終戦までわずか 2 日前の 8 月 13 日、大月はアメリカ軍の艦載機による空襲を受けました。

市街地に 30 発あまりの爆弾が投下され、都留高等女学校敷地にも 2 発着弾しました。そのうちの 1 発が校舎正面玄関東側に落ち、警戒警報発令に伴い学校防空要員として早朝より登校していた女学生、学校工場の作業に従事するために登校してきた女学生、合わせて 20 名と、女教師 2 名、用務員夫婦の 24 名が亡くなりました。

同年 8 月 28 日に学校葬が行われ、18 名



の遺髪を埋葬し、木製の墓標が建てられました。現在の遺髪塚碑は、1955（昭和 30）年に旧都留高女校舎の歴史を閉じる時の生徒会「山梨県立都留高等学校東校舎生徒会」により建立され、遺髪塚管理委員会（都留高同窓会）により整備されています。

大松山光照寺



江戸時代の初め、香山長端和尚により臨済宗として建立されましたが、江戸幕府の寺院統制政策（諸宗寺院法度）により、貞享 4（1687）年に谷村長生寺から一卓是教和尚を迎えて長生寺の末寺として曹洞宗に改宗しました。

本尊は薬師瑠璃光如来、脇侍に日光月光両菩薩らしき二尊と、眷属として十二神将を侍らし、各像とも丈は約三寸で厨子内に安置されています。

初め、駒橋三丁目横尾にありましたが、国鉄中央線、国道の開通により境内が分断されたため、昭和 25（1950）年に、現在地の駒橋一丁目仲山の地に移転しました。

境内には閻魔大王を祀る小堂や、菊花山（林宝山）から産出した菊花石があります。

●閻魔堂

永禄 12（1569）年頃、旧光照寺より東へ一丁ほど隔てた旧甲州街道沿いにあった八幡宮の堂に、運慶作といわれる閻魔像を本尊として安置し、閻魔堂としたと伝えられています。その後、元禄 12（1699）年に光照寺に寄進され、現在は光照寺の移転にともない境内に移設されました。

閻魔堂内には本尊である閻魔大王の座像

ともに十王像や奪衣婆や懸衣翁、その本地仏と思われる仏像などが安置されています。



十王とは、冥土(めいど)にいて、死者の生前の行いを審判する 10 人の判官のことです。もともとは中国の唐代に仏教と道教との融合で起り、日本でも平安時代末ごろから信仰が広まりました。十王の夫々の果たす役割については諸説ありますが、概ね次の通りです。没して後、7 日目(初七日)に秦広王(しんこうおう)が生前の殺生について、14 日目(二七日)に初江王(しゅこうおう)が盗みについて、21 日目(三七日)に宋帝王(そうていおう)が不貞について、28 日目(四七日)に五官王(ごかんおう)が嘘や言動についてそれぞれ調べて帳面に書き継ぎ、35 日目(五七日)に閻魔王がこれまで書き継がれた取り調べの記録に基き六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天)のどの世界に輪廻転生する(生まれ変わる)かを決定します。42 日目(六七日)に変成王(へんじょうおう)が生まれ変わる世界での諸条件を決め、49 日目(七七日)には太山王(泰山王)(たいざんおう)が男女の別や寿命を決定し最終判決を下します。七回の審理で決まらない場合は、追加の審理が三回、平等王(びょうどうおう)(百ヶ日忌)・都市王(としおう)(一周忌)・五道転輪王(ごどうてんりんおう)(三回忌)が行われます。追加の審理では、転生した故人を断罪するのではなく、遺族が追善供養することで、故人が転生した世界で受ける苦しみを軽くしたり、再審の機会を与えたりする救済するためのものであるとしています。

生前にあらかじめ十王に対して供養を行った者は、死後十王の審判を受ける時に罪を軽くされるといわれ、この考え方が庶民を十王信仰に向けたといわれています。

●菊花石

光照寺南にある菊花山の中段から産出される石灰岩には数多くのサングが含まれていて、石を砕いた断面に菊の花弁に似た模様を見ることが出来ます。このことからこの石灰岩を菊花石と呼び、その山名の由来となっています。

三界万霊塔



市立図書館の西、光照寺へと続く道の傍らに、石造物が四基並んでいます。

向かって左から、「日本廻國六拾六部諸願」(宝永 7 (1710) 年)・「庚申供養」(寛延 2 (1749) 年)・「萬霊等」(年代不明)・「三界萬霊塔」(寶永 2 (1705) 年)と刻まれています。

六十六部回国塔は、法華經を 66 部写経し、全国 66 か国を巡礼し、1 国 1 か所の霊場に 1 部ずつ納めることができたことを記念して建立されました。

なお、この塔は表裏が逆で、道に面した側に「願主 三哲正清上座」と造立者名が刻まれています。

庚申塔は、庚申信仰に基いて行われる庚申待(庚申講・庚申会)を 3 年 18 回続けた記念に建立されることが多いとされています。

三界万霊塔(等)は、三界(欲界・色界・無色界等諸説あり)におけるあらゆるすべ

てのものの霊をこの塔に宿らせて、この塔を回向することにより万霊を供養することを目的に建立されました。その多くは寺院の門前や墓地に建てられていますが、そこが多くの人から回向を受けやすい場所だったからと考えられています。

ちなみに、光照寺入口の万霊塔には、「宝永二年乙酉七月日 願主講中 大松山光照寺禅寺現住陽尊代立之」と刻まれています。

三島神社



富士山が活発に活動していた平安時代初めの 806（大同元）年、伊予国（愛媛県）大三島（今治市）の大山祇神社より大山祇命（おおやまつみのみこと）を勧請し、創建されました。富士山の噴火が続き田畑や山林が荒廃したため、富士山の神として祀られている木花咲耶姫命（このはなのさくやひめのみこと）の怒りを鎮めるため、父である大山祇命を迎えたと言われています。

神像は大月と駒橋の間にあった大松山の松の大木を伐り倒し、元・中・末の部分から 3 体作り、それぞれ田野倉、大月、殿上の三島神社に祀りました。このことから、各社を先ノ宮、中ノ宮、下ノ宮とよばれていたと『国史』には書かれています。

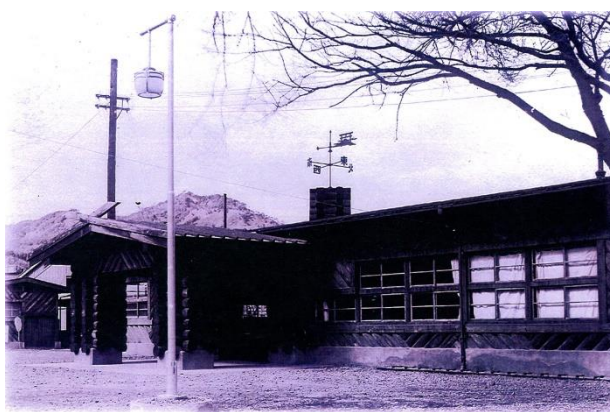
中の宮にあたる大月三島神社の境内には、江戸時代には 4 本の大きなケヤキの木があり、「四本木」「四つ木」とよばれ、御神木として敬愛され、また甲州道中を旅する人々たちにとっては目印として、大切にされてきました。しかしながら、江戸時代に 2 本、明治の初めにもう 1 本が枯れ、残った最後の 1 本は 1928（昭和 3）年に天然記念物

として国指定されましたが、付近民家の失火により被災したために衰弱し、1955 年に伐採されました。

古木があったとされるそれぞれの場所には、「大槻」「大樺」の文字と幹の周長を刻んだ標柱が建っています。

ちなみに標柱に刻まれる「大槻」の「槻（つき）」は樺（けやき）の古名で、大月の名はこの大槻から由来するともいわれています。

大月駅



1902（明治 35）年 10 月 1 日、中央線・大月駅が開業し、翌年 1 月 17 日に、駅前に富士馬車鉄道（現在の富士山麓電気鉄道の前身）が乗り入れたことにより、吉田・富士山方面への交流拠点としての役割が強化されました。

富士講信者をはじめとする吉田口からの富士山登山者に多く利用され、富士山麓電気鉄道（旧富士急行大月線の前身）が開通する前年の 1928（昭和 3）年に、富士山への登山口のイメージを持たせた山小屋風の駅舎に改築され、屋根には風見富士が置かれました。

風見富士は、東西南北を示しているほか、羽根の位置に富士山と鳥居の飾りがついた矢の先が富士山を示しています。

昭和 30 年代末にその姿を消しましたが、2015（平成 27）年、上下線ホームのエレベーター設置に合わせて復活しました。

国鉄時代には、その造りの珍しさから、全国によく知られた駅舎でした。1997 年には、「丸太を組み合わせ、周辺の山々の中にとけ込んでいる駅」という理由で「関東の駅百選」に選定されました。